

ママさんバレーにおけるスポーツ・コミットメントモデルの検討

—中断経験に着目して—

Examining the sports commitment model for “Mama-san” volleyball

—Focusing on stop experience—

スポーツクラブマネジメントコース

5015A320-8 福田 誉

研究指導教員 間野 義之 教授

1. 序論

1964年の第18回東京オリンピック競技大会での「東洋の魔女」と呼ばれた日本女子バレーボールの活躍をきっかけに、家庭婦人バレーボールが全国的に拡大したとされている（高岡，2008）。1970年には第1回目の「全国家庭婦人バレーボール大会」も行われており、ブランデージIOC当時会長（1952～1972）も「オリンピックムーブメントの生きた見本」として賞賛しており、世界バレーボール連盟も、世界唯一のこの大会を注目していると述べている（内海，2001）。しかし、近年ママさんバレーでは実施者の減少が問題となっている。例えば、松永ら（2005）は、「子育て」というものが女性のスポーツ参加に対する阻害要因を生み出していることを示している。女性の就業率が伸長している中で、離職理由としては結婚や出産が契機として多い（内閣府，2006）。松永ら（2005）の調査では非スポーツ実施者の促進条件の第1位が「家事・育児が軽減されれば」とされている。ママさんバレーは、新たなコミュニティの形成であり（内海，2001）、女性の社会進出に繋がる可能性があるため、実施者数を維持する対策を検討することは重要であるといえる。また、ママさんバレー実施者の中で、中断してから復帰をした経験者もいるため、中断経験に着目した研究を行うことでスポーツの実施・継続に効果的な対策を導き出すことができると考えられる。

わが国のスポーツ実施に関する先行研究は、スポーツ行動の規定要因を探究した研究が多く、スポーツ目的論・手段論の立場から説明がされてきており、また調査時点でのスポーツの実施、非実施を説明するものが多い。金崎（1992）は「スポーツの目的論や手段論を超えたもっと別の視点からのアプローチが必要」と述べており、どうすればスポーツ活動に繋がるのかといった未来予測的な理論が求められている。そこで注目されたのがコミットメントの概念である。コミットメントに

関する研究はアメリカにおいて1960年代に始まっており、Scanlan, et al.（1993）は、個人のスポーツ行動の実施や継続化を説明するのに有効な手段としてスポーツ・コミットメント理論を提唱し、スポーツへのコミットメントが強く形成されている者ほど、スポーツとの結び付き、あるいはかわりが深いことが明らかにされている。日本の文化に合わせたコミットメントの研究も行われている（高峰ら，1997）。近年では、スポーツ・コミットメントの規定要因の検討も進められており、わが国では萩原ら（2013）が、スポーツ・コミットメント形成につながるモデルの検討を行っており、社会的要因が心理的要因を媒介しスポーツ・コミットメントを形成する過程を明らかにしている。村上（2005）は「運動行動に関連していると思われる要因を用いて理論・モデルを構築し、その枠組みの中で検証することが必要」と述べているが、わが国の研究の蓄積が多いとはいえない。さらに、成人女性を対象に検討した研究も数は少ない。

そこで、本研究の目的は、ママさんバレーの実施者を対象に、萩原ら（2013）モデルを仮説モデルとして用い、ママさんバレーにおけるスポーツ・コミットメントの形成過程を明らかにすることである。さらに、ママさんバレーでの中断経験の有無において両モデルの比較を行い、参加するためにどのようなサポートが必要かを検討する。

2. 研究方法

萩原ら（2013）のスポーツ・コミットメントモデルの測定項目に従い、調査項目については、予備調査の結果から内容の検討を行った。調査対象は、第40回記念やまゆり杯・小田急争奪「神奈川県家庭婦人バレーボール大会」参加チームのうち、神奈川県ママさんバレーボール連盟登録者とした。調査方法は、質問紙郵送法によって実施することとし、質問紙は大会開会式に返信用封筒とともに

配布した。回収期間は 2015 年 11 月 12 日～11 月 30 日とした。

3. 結果

回収の結果、分析に用いる項目が完全回答でなかった調査票を除外したところ、有効回答数は 339 通となり、有効回答率は 67.8%であった。仮説モデルに従い、共分散構造分析を行った。尺度の収束的妥当性の確認をしたところ、プレーヤーアイデンティティーが.50（7 項目から 4 項目）でスポーツ・コミットメントが.52（6 項目から 4 項目）となり、適合度は CFI=.906、RMSEA=.087 となり、許容可能な値であった。また、すべての標準化したパス係数は手段的支持からプレーヤーアイデンティティーへのパスを除き有意であった。（図 1）

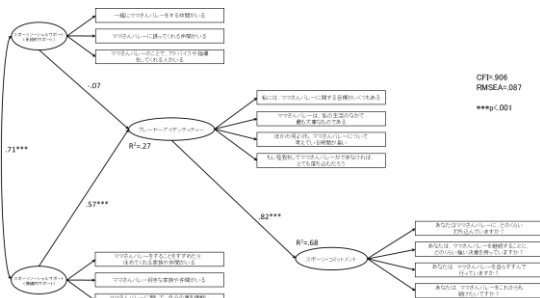


図1 ママさんバレーにおけるスポーツ・コミットメント形成モデル

次に、ママさんバレーへの参加中断経験の有無の両モデルの比較を行うため、多母集団の同時分析を行い、推定値の違いを想定する配置不変を仮定した。全てのパスでパラメータ間の差の検定を行った結果、手段的支持からプレーヤーアイデンティティーへのパスでは有意な差がなく、手段的支持と情緒的支持間のパス ($t=3.55$, $p<.001$)、情緒的支持からプレーヤーアイデンティティーへのパス ($t=2.85$, $p<.001$)、プレーヤーアイデンティティーからスポーツ・コミットメントへのパス ($t=2.75$, $p<.001$) において、有意な差があることが明らかになった。（図 2）

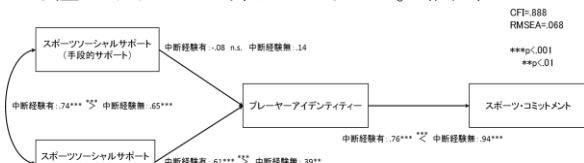


図2 多母集団における同時分析結果

4. 考察

仮説モデルの検討では、ママさんバレーでは手

段的サポートからプレーヤーアイデンティティーへのパスを除いたすべてのパス係数が有意であると判断され、萩原ら（2013）の研究を支持する結果となり、モデルの妥当性も示された。ママさんバレーにおいて情緒的なサポートを、血縁者である家族からはもちろんのこと、非血縁者であるチームメイトなどからも日常的に行なうことが、ママさんバレープレーヤーとしての自己を形成し、スポーツの実施・継続行動に関連のあるコミットメントを高めるという可能性が示唆された。

中断経験の有無のモデルを検討した結果、手段的支持と情緒的支持の関係において、中断した経験のある人の方が、ソーシャルサポートの関連性が高いことが明らかになった。中断時に周りの人からサポートを受けて復帰した過去の体験が、差を生じさせたと考えられる。また、これから中断する可能性もあるため、実施者にはサポートは重要であることが示唆された。情緒的支持とプレーヤーアイデンティティーの関係においては、中断した経験のある人の方が影響が強いことが明らかになった。中断によって、ママさんバレーというコミュニティから離れた際に、チームメイトからの「また一緒にバレーをしよう」などの誘いが、ママさんバレープレーヤーである自己を再認識し、強くその役割を形成している可能性があるため、差が生じたと考えられる。プレーヤーアイデンティティーとスポーツ・コミットメントの関係においては、中断した経験のない人は、ある人に比べると参加しやすい環境にいる可能性があるため、差が生じたと考えられる。

5. 結論

ママさんバレー実施者の減少に歯止めをかけ、チーム数を維持するためには、継続して実施してもらわなければいけない。特に、中断を余儀なくされた人たちに復帰してもらうためには、スポーツすることを「すすめる」「ほめる」そして「理解をする」ことが重要になる。そして、それらをママさんバレーに関わる身近な他者が行う事によって、彼女たちのママさんバレープレーヤーとしての自己を形成し、ママさんバレーの実施・継続化につながる可能性が示唆される。本研究の結果は、わが国のママさんスポーツおよびスポーツ実施・継続に関する新たな知見を付加できたと考える。